

研究紀要

農業部会

主テーマ 生徒の「生きる力」を育む活力ある農業教育の創造と実践

【 第1分科会 】(生産経営/環境創造系)

テーマ 『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導および社会の
グローバル化に対応した農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべきか』

青森県立弘前実業高等学校	教 諭	三 上 暁 郎	1
青森県立名久井農業高等学校	教 諭	柳 沢 幸 恵	3

【 第2分科会 】(資源活用系)

テーマ 『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導および社会の
グローバル化に対応した農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべきか』

青森県立柏木農業高等学校	教 諭	舘 山 昭 廣	5
青森県立五所川原農林高等学校	教 諭	山 形 謙 輔	7

【 第3分科会 】(学校経営系)

テーマ 『生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための
農場運営・寮運営はどうあるべきか』

青森県立三本木農業高等学校・ 青森県立三本木農業恵拓高等学校	教 諭	佐々木 篤	9
-----------------------------------	-----	-------	---

【 講演会 】

演 題	「グローバル GAP の今日的意義～日本農業と地域の未来に向けて～」		
講 師	GAP 普及推進機構	理事長	
	GLOBALG. A. P. 協議会	理事長	
	星薬科大学	特任教授	
	日本農産物輸出組合	顧 問	
	横田コーポレーション	代 表	
	横 田 敏 恭 氏		12

【 部会の動き 】 18

【 研究テーマ 】 19

紀要編集委員 田 中 満 (五所川原農林高等学校)

農 業 部 会

【 第 1 分科会 】（生産経営/環境創造系）

テーマ

『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導および社会の グローバル化に対応した農業教育、キャリア教育の推進はどうあるべきか』

研究協議の視点

- (1)教科指導の展開と評価
- (2)地域人材・資源等を活用した農業経営や6次産業化（商品開発含む）等に対応した学習の展開
- (3)国際交流や特色ある学校設定科目等による教科指導の実践
- (4)先進的（ICT、スマート農業、SDGsなど）で魅力ある農業教育の取り組みの実践
- (5)GAP（農業生産工程管理）、HACCP（危害分析重要管理点手法）を取り入れた農業教育の実践
- (6)他の教育機関（大学・農業大学等）や関係機関等と連携したキャリア教育の推進
- (7)農業教育の活性化につながる学校農業クラブ活動の実践

助言者	青森県立五所川原農林高等学校	教 頭	佐 藤 宏 之
司会者	青森県立名久井農業高等学校	教 諭	北 上 守
発表者	青森県立弘前実業高等学校	教 諭	三 上 暁 郎
	青森県立名久井農業高等学校	教 諭	柳 沢 幸 恵
記録者	青森県立名久井農業高等学校	教 諭	奥 瀬 翔 太
	青森県立名久井農業高等学校	実習教諭	田 茂 敦

1 発表内容および質疑応答

○青森県立弘前実業高等学校 教諭 三 上 暁 郎

(1) はじめに

本校は、津軽十萬石の城下町「弘前市」に位置し、特色の異なる6学科の専門性を活かした学習活動を展開し、平成30年度には、創立100周年の節目を迎えた。「地域と共に、地域のため」をモットーに、地域の農業課題に取り組む貴重な農業高校としての役割を果たしてきた。

しかし、青森県立高等学校教育改革推進計画により、農業経営科は令和3年度募集停止、令和4年度末で閉科となることが決定。非常に残念ではあるが、農業経営科が存在した意義・役割を地域に示していきたいと、今年度、最後の38名の生徒は日々の活動に取り組んでいる。

(2) 「農業経営」の展開・指導方法の工夫と評価

① 授業展開

「農業経営」は、2年次に3単位、3年次に3単位の計6単位実施している。2年次には、教科書・農業簿記の学習を中心に農業経営に関する知識を習得、3年次になると、模擬会社を設立・農業経営シミュレーションを行い、各会社で生産した野菜を校内外で販売している。

② 指導の工夫

ア 農業実習では5～6人1班で協力して作業を行わせている。準備や後片付けまで責任を持って取り組ませる。

イ 種代・苗代等は農業経費とし、野菜の売値は市場調査をした上で、各班で決定する。より実践的なシミュレーションを行えるように工夫している。

ウ 結果を各班でまとめ、最後に発表会を実施。他の会社と競わせている。

③ 評価

筆記試験と観点別評価を重視し、実習態度や授業に対する意欲を評価している。会社の経営状況や、発表会でのまとめ方法も重視する。

(3) 「課題研究」の展開・指導方法の工夫と評価

① 「果樹研究班」の活動紹介

ア りんご新品種「初恋」の調査研究及び普及活動

「初恋」は、弘前実業高校農業経営科開発の新品種。着色良好で、糖度が高く食味良好なのが特徴。令和2～4年度の研究活動でこの果実の調査を行い、品種登録及び商標登録の出願申請を実施した。新聞、テレビなどのメディアも活用し、PR活動も行っている。

イ 株式会社原田種苗とのコラボ企画

新品種「初恋」を活用し、接ぎ木技術の伝授に加え、共同研究・販売を実施。令和3年度に「初恋」の苗木を500本限定で生産し、10月から販売を実施。販売に合わせて、カタログのデザイン制作、初恋マーク、Tシャツ等のノベルティグッズの作成等を行い、準備に携わった。

ウ 弘南鉄道株式会社とのコラボ企画

今話題の、弘前実業高校の新品種「初恋」の樹を弘南鉄道沿線に植樹していきたいと、企画が決定。本校の生徒も利用する弘南鉄道大鰐線の沿線で植樹場所を検討し、松木平駅への植樹が決定し、3本の初恋の樹を植樹した。

エ 「初恋文化祭」開催

弘南地域県民局の協力もあり、多様な催しを企画し、盛大に盛り上がった。この文化祭では、弘南鉄道大鰐線の沿線にある他の学校にも協力を依頼。ベンチの作製やオリジナルスイーツ「初恋の甘酸っぱい味がよみがえる瓶詰めみたらし団子」の製造をお願いし、地域ぐるみで盛り上げて行きました。また、応援部隊としてアイドルグループ「青森ナイチンゲール」3人も駆けつけ、会場を盛り上げてくれた。

② 評価

ア 観点別評価をふまえ、普段の授業に対する取り組みや記録、レポートを評価する。

イ 3月に課題研究発表会を実施し、発表力や研究に対する理解度を評価する。

(4) まとめ

本校の農業経営科は今年度末で閉科となるが、「農業経営」「課題研究」を中心とした特色ある教育活動により、地域に貢献し、地域と共に歩んできた。最後に、りんご新品種「初恋」の植樹や苗木の販売を実施し、農業経営科の存在意義を十分に示すことができた。今後はこれらの地域資源を有効活用し、地域の方々と共に更なる発展していくことを期待しています。

(5) 質疑応答

(柏木農業) 農業経営シミュレーションでの売上の扱いはどうなっているのか。

(弘前実業) 種子や資材を買う費用は生徒が出すので、売上も生徒に還付する。給与として売上を活用する班もある。

(柏木農業) 「初恋」の苗木の生産と販売は学校で行っているのか。

(弘前実業) 生産と販売は「原田種苗」に委託している。

(柏木農業) 閉科になった後、沿線に植えたりんごの管理はどうなるのか。

(弘前実業) 沿線の農家に管理をお願いすることになっている。

(名久井農業) 農業経営シミュレーションで、班の活動に参加しない生徒が出た場合どうしているのか。

(弘前実業) 実業の場合は、ほとんどの生徒が積極的に参加する。参加しない生徒には、活動をしないと赤字になり、自分自身が損をする事を自覚させる。

○青森県立名久井農業高等学校 教諭 柳沢 幸恵

(1) はじめに

名久井岳と馬淵川にいだかれた農業豊かな南部町に佇む本校では、多種多様な農産物が収穫される。その豊富な収穫物をどのように活用することで、より付加価値の高い製品を製造することができるかは、生徒との学習活動において常に考えていく必要がある。これまで取り組んだ学習内容、今後取り組む学習内容について触れる。

(2) 内容

① 昨年度の製品

ア 生産を伴う部門

とり味噌 さくらんぼジャム 桃ジャム 桃ジュース 葡萄ジュース 林檎ジャム 林檎ジュース
おかず味噌

イ 生産外

プラムジャム プルーンジャム カリンジャム 柿ジャム カボチャジャム さつまいもジャム
ブルーベリージャム 農家さんのたれ など

ウ アンテナショップ：年 10 回程度で試作品数十種類（野菜・果実等）

② 地域資源を活用した今年度の予定製品。基本的に必ず毎年新しい製品を製造するようにしている。

シャモロック味噌 お魚味噌 菊ジャム 杏子ジャム ソルダムジャム ダチョウ味噌 トマトジュース
桃の缶詰 梨の缶詰 など ※地元の資源を利用した製品作りに重点を置くこと。

③ 地域人材の活用

ア 梅サクランボセンター（インターンシップ）

イ 農産物加工研究所（製造工程の確認）

ウ 地元の原材料購入業者（より有用な利用方法のアドバイス）

エ 商品開発系のHP（新しい素材の利用方法の模索）

④ 実習内容について

ア アンテナショップについて

本校では年間を通じて地元のNPO法人のスペースをお借りし、販売実習を行っている。その販売物として課題研究での試作品を1回につき7～8作品程度出品している。春の山菜からはじまり冬の野菜まで、できるだけ学校で収穫するすべての農産物を活用するようにしている。また、学校の収穫物だけでなく、地元の農家さんが育てた収穫物を提供していただくことも多い。そのような環境の中で、あらゆる素材の活用方法を知ること、深い学びにつなげたいと考えている。また、商品開発という観点から同じ試作品は出品しないため、年間100種類以上の製品を試作している。

イ 製造実習について

指導には根気が必要だが、2年間の学習活動を通じて、果実の糖度を踏まえた製品の糖度調整やクエン酸量の算出方法、味や風味の調整など、生徒が主体となって活動できるようになる。3年次の夏頃には、ようやくこちらがほとんど指導することなく実習に必要な習得できるようになっている。

また、教員1名と生徒数名での実習となっているため、ボイラーの扱い方、各種製造機器の取り扱い等も、一緒に学習し、少しずつ生徒も操作できるようにしている。

(3) 最後に

収穫物の活用には積極的に取り組んでいるが、商品デザインや情報発信など、教員と生徒の人数の少なさやその学習にあてる授業時間の確保ができないなど、バランスの取れないことが課題である。また、生徒がアイデアを創出するための指導もなかなかできていないのが現状である。生徒との実習が生産を伴う予算のすべての歳入を賄っているため、生徒への負担もかなり多い。今後は、バランスの取れた学習活動の取り組みが課題である。

(4) 質疑応答

（柏木農業） 実習助手がいない中で、効率よく製造実習するために工夫していることがあるか。

（名久井農業） 生徒に製造工程を理解させることで効率化を図る。理解度の高い生徒をリーダーにし、生徒が生徒に教えていく仕組みを作り、時間をかけて生徒に製造工程を理解させる。

- (柏木農業) 多くの加工品を製造しているが、保健所に製造許可を出す場合こういった工夫をしているのか。
- (名久井農業) 製造する可能性あるものは事前に保健所に伺いを立てている。日々記録を取ることで届け出の効率化が図れる。

2 指導助言 青森県立五所川原農林高等学校 教頭 佐藤 宏之

本分科会のテーマの中の、「主体的・対話的で深い学び」は、①教師側が、学習の見通しを立てる。②生徒が学習したことを振り返り、学びや変容を自覚する。③対話によって自分の考えを広げたり深めたりする。つまり、「授業者」における授業の改善、「学習者」における学びの改善のことである。弘前実業高校の発表では、『農業経営』で模擬会社を想定して経営シミュレーションを行う。『課題研究』で、学科で開発したりんごの新品種で、地域の企業との技術指導やコラボ企画、他校との交流、グッズの作成と発展させた内容であった。生徒が主役で、達成感・有用感を感じられる内容であった。

『課題研究』は、『総合的な探究の時間』の代替で、①課題設定、②情報収集、③整理・分析、④まとめ・表現、それから新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく。このPDCAサイクルによって系統的、体系的に積み上げられる。名久井農業高校の発表では、学校や地域の農産物を活用し、地域の人材を活用しながら、100種類以上の製品を試作している。同じ試作品を作らない、様々な加工方法を試す、アンテナショップで評価を受ける、この試行錯誤の連続が大切である。

各校の事例では、「学びのたね」がたくさんあった。教師は、生徒にとって「おもしろい」、「新しい発見」、「わかった」という授業になるように日々改善しながら行って欲しい。私たちは、青森県の未来を担う大切な子どもを育てている。高教研をとおして、各校の先生方と情報交換することで、実践例を活かしながら魅力ある農業教育につなげていければと考えている。

【 第 2 分科会 】（資源活用系）

テーマ

『「主体的・対話的で深い学び」に対応した教科指導および社会の

グローバル化に対応した農業教育，キャリア教育の推進はどうあるべきか』

研究協議の視点

- (1)教科指導の展開と評価
- (2)地域人材・資源等を活用した農業経営や6次産業化（商品開発含む）等に対応した学習の展開
- (3)国際交流や特色ある学校設定科目等による教科指導の実践
- (4)先進的（ICT，スマート農業，SDGsなど）で魅力ある農業教育の取り組みの実践
- (5)GAP（農業生産工程管理），HACCP（危害分析重要管理点手法）を取り入れた農業教育の実践
- (6)他の教育機関（大学・農業大学等）や関係機関等と連携したキャリア教育の推進
- (7)農業教育の活性化につながる学校農業クラブ活動の実践

助言者	青森県立名久井農業高等学校	教 頭	竹 鼻 一 男
司会者	青森県立五所川原農林高等学校	教 諭	山 口 昭 一
発表者	青森県立柏木農業高等学校	教 諭	舘 山 昭 廣
〃	青森県立五所川原農林高等学校	教 諭	山 形 謙 輔
記録者	青森県立五所川原農林高等学校	実習講師	佐 藤 遼 弥
〃	青森県立五所川原農林高等学校	臨時講師	棚 内 里 菜

1 発表内容および質疑応答

○青森県立柏木農業高等学校 教諭 舘 山 昭 廣

(1) 本校の概要

本校のある平川市は、2006年に平賀市・尾上町・碓ヶ関村の3町村が合併して誕生した津軽平野の南部に位置している。気候風土に恵まれた農業に適した地域で基幹産業は稲作をはじめ、リンゴ、ブドウやモモなど果実栽培も盛んだ。現在平川市ではモモの栽培に力を入れている。このことから、色々な農業が主産業の地域であることが分かる。また猿賀神社や盛美園、志賀坊森林公園や白岩公園、碓ヶ関温泉郷など自然や豊富な温泉源をもつなど観光資源にも恵まれている地域である。

本校は2025年に100周年を迎える学校で、現在の学科は生物生産科・環境工学科・食品科学・生活科学科の4学科を設置し、各学科35名、1学年140名を定員としている。食料の生産・地域環境を考慮した保全型農業の確立と言う『持続可能な農業への挑戦』を意識した学習目標を掲げている。

環境美化活動では、昭和60年から継続してきた校内緑化活動（柏農の森、恵の森、日本庭園・西洋庭園整備、国蝶オオムラサキが舞う香りの森づくり）が評価され、平成31年には緑化推進運動功労者内閣総理大臣表彰を受けている。

(2) 内 容

① 本校の抱える課題

ア 非農家子弟入学の減少

農業高校入学者の多くは、農家の子弟が多く、家業の農業生産のための知識・技術の取得を目的としていたのだが、近年では水田農家は大規模経営化・大型機械化をしている。また、自分の子供を就農させようという意識が低いことから、逆に非農家の子弟の入学が主流となっている。そのため、土を扱う農業に対する興味を持たせる教育が優先されている。このことから、学校での農業教育が校内で完結してしまうものが多くなり、魅力が発信しにくい内容となっていた。

イ 本校の活動内容が地域に理解されていない

農業高校での行事や各学科の特色を生かした教育内容がメディアに取り上げられても、家庭での新聞購読部数が減少しており、生徒に聞いてみると約4分の1程度の家庭しか新聞を購読おらず、新聞記事

の内容を知らない世帯が増えている。若者世代ではスマートホンの普及に伴い、家庭でテレビ特にニュース番組を見る人数が減少している。そのため、新聞やテレビニュースで取り上げられた話題が、ネットニュースとして見た時に初めて生徒たちが興味を持つのが現状だ。これらの理由から、これまでの情報発信では、本校の活動内容がなかなか理解されにくくなっている。

② 課題解決策

ア 課題研究活動において、地域特産品を取り入れた商品開発や栽培指導を受けることで、農業に対して興味・関心を高める教育内容の精選。校内で指導を完結させるのではなく、外部講師を招く・校外活動を取り入れる・外部の人から自分たちはどう見られているのか意識付けさせながら活動に取り組んでいる。各学科の特色を生かしながら、地域特産を教材に取り入れた学習活動を行っている。

(ア)生物生産科：本県農業の基幹産業である稲作とリンゴ栽培に特化した教育内容

水田班：大規模区画水田（1区画：2ha）で農業機械を使った作業効率の改善を図る栽培

果樹班：高密度植栽に挑戦。学校内だけでなく、一般農家の見学に行っている。また、リンゴやブドウ、モモの剪定枝を燻製用チップに加工する取り組みも行っている。協力いただいた企業が、原田種苗（弘前市）、甚八リンゴ農園（平川市）である。本校りんごと米粉を使った「柏農シューロール」の商品開発も行なっている。これは10月に行われる産業教育フェアで披露する予定だ。シャロン甘洋堂（黒石市）、米粉をケイホトライス（中泊町）に依頼をし、作るだけでなく、講師として作り方を生徒の意見も取り入れながら実施している。

野菜班：カボチャ栽培指導・販売。弘前青果市場（弘前市）の指導を受けながら、かぼちゃ栽培を実施。収穫したカボチャは、いとく平賀店（平川市）で販売を予定している。

(イ)環境工学科：絶滅危惧種の保護や地域特産植物の保護など環境問題解決のための教育内容

環境緑化班：令和元年から絶滅危惧種指定されている「オオムラサキ」を本校で復活させる活動。

環境土木班：ビオトープで北限の和蓮やクジャクガシワの栽培をしている。どちらも猿賀神社（平川市）にあり、特に北限の和蓮は群生しているということで、猿賀神社から分けていただき栽培している。将来的に本数を増やしていきたい。

(ウ)食品科学科：平川市が特産として力を入れている食材の活用方法や稲作副産物を活用した微生物利用などの教育内容。

加工品開発班：現在平川市が力を入れている「平川サガリ」に合う焼き肉のたれ開発、サガリ肉を活用した料理レシピの開発に取り組んでいる。カネショウ（平川市）、水木精肉店（平川市）の協力を得ながら継続的に活動が続けている。

微生物利用班：稲作で出た副産物を利用したダンボールコンポストを利用したヒラタケ栽培。

(エ)生活科学科：環境美化や白神山地再生活動、こぎん刺しへの挑戦などの教育内容

草花班：平川市役所で管理する花壇植栽活動、平賀駅前広場植栽活動。弘南鉄道駅舎（平賀駅・尾上駅・黒石駅）で生徒が作成したプランター設置、津軽サービスエリア植栽活動はネクスコ東日本と協力しながら毎年春と秋の2回活動を行っている。

生物活用班：白神山地の再生と保全活動としてブナの発芽試験、室内装飾用の生物利用。

イ 本校では稲作とリンゴ栽培においてGLOBAL G. A. P.（世界基準の農業認証）を取得、食品加工においてはHACCP（食品危害要因分析重要管理）を取得しており、農産物の販売、輸出活動を積極的に行っている。本校をPRする上で行ってきたことは5つある。

(ア)修学旅行におけるりんご販売（京都府）

(イ)東京オリンピックデンマーク代表チームが秋田で合宿した時にりんごの提供

(ウ)台湾へヤマハチアップルを通じてりんご輸出する計画

(エ)米国・東南アジアへ青森トレーディング社を経由してりんご輸出を計画

(オ)台湾寶吉祥への加工品輸出

ウ 学校HP・SNSの充実

活動内容を今までは学校HPに掲載していたが、ICT教育の重点校として、学校としての活動を幅広く知ってもらうため、これまでの学校HPを充実させることはもちろんインスタグラムやフェイスブックなどを活用した情報発信により、SNSの積極的活用も行っている。

(3) まとめ

農業高校の活動は、校内完結型の教科指導から、地域で抱える課題を地域とともに取り組む地域完結型変え

ることが、農業高校の使命である。多様な農業に対応できる人材の育成がこれからの農業高校に課せられた課題だ。しかし、農業の基礎・基本をしっかりと身につけ、指導者主導の学習形態から抜け出せないことから、多様な経験を積み、さまざまな人たちと対話することによって、その経験から次は自ら疑問を持って課題解決に取り組む教科指導を構築することが必要だと考える。

(4) 質疑応答

(三農) 課題研究等で外部人材と活動した後に振り返りをどのように行なっているのか。

(柏農) グループで発言するより個人的に発言する機会を設ける。レポートでどのように感じたか、次に繋がるための次にどのようにしたいかを記入させている。言葉だけでは時間が経つと忘れてしまうため、文字で残して記録する。記録したことをもとに、外部講師と打ち合わせする際に生徒が疑問に思っていることを伝え、次回の実習に繋げている。

(名農) 外部との連携について、学校から出向いて連携するのか外部から来るのか教えていただきたい。

(柏農) 業者から声をかけられることもあるし、生活科だと市役所から持ち込まれることもある。学校から業者選択をして声をかけることもある。

○青森県立五所川原農林高等学校 教諭 山形 謙 輔

(1) 学校概要

本校は明治 35 年に創立され、今年で 120 周年を迎える農業専門高校である。学科構成は現在、食品科学科・環境土木科・森林科学科・生物生産科の計 4 学科、生徒数は 343 名であり、相撲部・野球部をはじめとする部活動が盛んな学校である。平成 28 年度入学生より生活科学科の募集を停止し、平成 29 年度末で閉科となった。

未来の産業界を担う人材を育成するためには世界のルールや流通を学ぶことはとても重要であると考え、農業生産工程管理の国際標準である GLOBALG. A. P. 認証（世界 130 ヶ国、約 21 万経営体）を今年度はりんごと米で認証取得を目指している。森林科学科でも、森林経営の国際的な認証である FSC（世界 85 ヶ国、約 1,500 経営体）に注目し、国際認証教育に取り組んでいる。（※認証されている国の数、経営体数は、令和 4 年 3 月現在）

【学校経営方針】

「正剛明朗」の校訓のもと、倫理観・正義感、強くたくましい心身をもって正道を歩み、命を学び、命を考え、命を育てる農業人及び広く産業人として郷土に誇りをもち、異質なものを寛容な心で理解し多様性を尊重する精神と新しい時代を自ら切り拓く豊かな創造力をもった、太陽のように明るく慈愛に満ちた光で地域を照らす人財を育成する。

(2) 研究協議の視点

地域人材・資源等を活用した農業経営や 6 次産業化（商品開発含む）等に対応した学習の展開

本校が位置する西北地域は水田経営や野菜経営が基幹産業である。稲作はもちろん、メロンやスイカ、毛豆など特産となっている農作物が多くある地域だ。未来を担う人材を育成していかなければならないため、学校内だけでなく地域と協力しながら、地域の農業のスペシャリストと協力し、後継者を育成していくための地域人材、地域資源を活用した事例を紹介していきたい。事例に関する授業は事例Ⅰが野菜、事例Ⅱは農業と環境の授業で行っている。そこでの関係機関との取り組みなどについて述べていきたい。

(3) 農業教育実践事例

① 活動事例Ⅰ 高校生と園児による宇宙毛豆交流会

令和 4 年度 5 月 25 日生物生産科 2 年生 26 名とつるた乳幼児園年長 14 名と宇宙毛豆の播種交流会を実施。9 月下旬には収穫交流会も予定している。収穫後は大豆にして 12 月に食品科学科 2 年生が宇宙毛豆を使った豆腐作り体験も予定している。この事業は、毎年つるた乳幼児園と行っているわけではなく、地域の保育園を変えながら交流を行っている。毛豆は青森県の津軽地方を中心に代々農家で受け継がれる在来種であるが、農業就業人口減少に伴い生産数が減少している。そこで 10～11 年前に本校で育てていた毛豆を国際宇宙ステーション「きぼう」で 6 カ月保管後本校で発芽した毛豆を宇宙毛豆と呼んでいる。野菜の授業で宇宙毛豆について学習し、学習したことを園児たちに伝え、交流をすることで生徒の自己肯定感や主体性を高めることが期待できる。

生徒自身が園児にわかりやすく伝えるためにどうしたらよいか考え「紙芝居」で説明してはどうかと提案があり、紙芝居で説明した。実際に作られた紙芝居は、豆が種子の段階からどのように成長するか、宇宙での滞在の様子、さやの大きくなる様子などを園児が興味をひくような絵を生徒自身が考えて活動をしていた。

地域資源を活用し、異年齢との交流で生徒自身が主体的に活動できる場となり、人と関わる喜びを得られることから、自己肯定感を高めることができると考えられる。来年度以降の課題として、紙芝居だと活動できる人数が限られてしまうことから、iPadのGoogleスライドを活用し、サイトを見せたり、アニメーションもつくことでさらに興味を持ってもらえると考えている。

② 活動事例Ⅱ つがりあんメロン栽培プロジェクト

平成18年から後継者育成事業として、青森オリジナルメロン生産連絡協議会、弘果弘前中央青果の協力により今年で17回目となる。最初は50aと大きい区画で活動していたが、管理作業がうまくいかず、出荷基準に見合う栽培ができないことから、現在は5aで栽培をしている。品種は「ハニーゴールド」である。土づくり、定植、栽培管理、収穫、競売見学までの学習となっている。昨年度から定植前に「農業高校生と生産者をつなぐオンライン授業」と題してGoogleMeetを使用し、収穫直前の生産者から栽培の基礎や心構えを学ぶことで、生徒のメロン栽培学習に対する関心と意欲を高めるという授業を実施した。自分たちでどうしたら美味しいメロンが作れるのか考え、実践することで主体性を伸ばすことができる。また、競売見学を行うことで自分たちが育てたメロンに値段がつく場面を見ることが成功体験となり達成感を味わうことができ、さらに自己肯定感を高めることができる。今後も、生徒がさらに興味を持って取り組めるよう活動内容を改善していきたい。

(4) 今後の課題

予測が困難な時代となっている現在、一人一人が持続可能な社会の担い手として成長していかなければならない。また、AIやIoTが広がり、Society5.0と呼ばれる時代が到来し、社会や生活を大きく変えていくことが予測される。その中で成年年齢の引き下げもあり、子どもたちは未来社会を切り拓いていくための資質・能力を身につける必要がある。そのために、教員も知識・技術を身につけるため、研修への参加や外部人材と積極的に交流し生徒に還元していく必要があると感じている。また、宇宙毛豆、つがりあんメロンのような地域資源、弘果弘前中央青果の地域人材を活用した農業教育を行い継続、発展させていく。これらの農業教育を行いながら、グローバルな視野をもつ力を育つようにしていくことが課題である。農業や農業関連産業に携わる者の育成などのキャリア教育の推進はある程度できている。しかし、地域資源、地域人材を活用しグローバルな視野を身につけるといえるところはまだまだである。本校で取得しているグローバルギャップ学習は継続しながら、宇宙毛豆、つがりあんメロンという地域資源をICTや外部人材を活用し、販売や情報の発信、収集などを行いグローバルな視野を生徒に身につけさせたい。

(5) 質疑応答

(名農) 外部と連携とすることで苦勞することは何か。

(五農) 授業の時間と、弘果の人との時間調整が苦勞している。火曜日の5・6時間目に行っているが、弘果も休みの前日で忙しく、別の日に変更して欲しいと要望があると、1週間に1回ずつやらなければならない作業があるため、1週ずらすと全て遅れてしまうため、時間の調整の部分が一番苦勞している。

(柏農) メロン農家の後継者が減少傾向になりつつあるが、メロン栽培をやりたい、メロン農家を継ぎたくて入学する生徒は多いのか。

(五農) 毎年メロン農家を継ぎたいと言って入学して営農大学校に進学してから継ぐ生徒はいるがたくさんいるわけではない。今年の1年生はメロン農家の生徒が3人いて将来的に後継者になってくれればと思っている状況だ。

2 指導助言 青森県立久井農業高等学校 教 頭 竹 鼻 一 男

本日は発表された2人の先生発表お疲れ様でした。弘果のメロン栽培や大規模農業・企業と連携した加工品開発など外部講師を有効的に利用し生徒の興味関心を引き出す授業を紹介してくれました。ところで、「博士ちゃん」という番組を見たことがありますか。登場する小学生の子どもが大学教授と肩を並べる知識を持っている様子をみて、凄いな、何がきっかけで興味をもつようになったのかと思います。「知らない事には興味を持ってない。」「興味の無いことは覚えられない」と言われています。興味を持つと子どもは自ら学ぶものだと教えられているようです。2人の先生はその意味でも興味関心を高める機会を多く与えていたと思います。

私の好きな言葉の1つに「教師は最大の教育環境である」「教師は子供の環境である」があります。時代の変化に伴い、黒板とチョークで教育できた時代からICTの有効利用へと教育環境の整備が進められています。最先端は日々進化し続けます。生徒の変化に対応し自分自身に磨きをかけることが一番大切です。そして、生徒の視点で興味関心の入口を提供し生徒をワクワクさせることを期待します。

【 第3分科会 】(学校経営系)

テーマ

『生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための

農場運営・寮運営はどうあるべきか』

研究協議の視点

- (1) 学校の特色を生かした魅力ある学校農場の在り方
- (2) 「社会に開かれた教育課程」に対応した農場運営・寮運営
- (3) 地域や関係機関と連携した教育環境（研修、施設設備等）の充実

助言者	青森県立弘前実業高等学校	教 頭	太 田 良 孝
司会者	青森県立三本木農業高等学校・ 青森県立三本木農業恵拓高等学校	教 諭	村 崎 匡 利
発表者	青森県立三本木農業高等学校・ 青森県立三本木農業恵拓高等学校	教 諭	佐々木 篤
記録者	青森県立三本木農業高等学校・ 青森県立三本木農業恵拓高等学校	臨時講師	佐 藤 匠
〃	青森県立三本木農業高等学校・ 青森県立三本木農業恵拓高等学校	臨時講師	新 山 遥 希

1 発表内容および質疑応答

○青森県立三本木農業高等学校・青森県立三本木農業恵拓高等学校 教諭 佐々木 篤

- (1) はじめに
- (2) 学校概要

本校は明治31年（1898年）青森県農学校として設立され、令和3年には十和田西高校（普通科1クラス・商業科1クラス）と六戸高校（普通科2クラス）と統合して、「三本木農業恵拓高校」となり、普通科を有する併置校となった。また、農業の拠点校として県全体の農業教育の充実を図り、農業分野について幅広く学ばせることとされ、農業教育の中核的役割を果たす本校と他の高校との間で、生徒の研修や教員研修等で連携した取組を実践している。現在3年生が最後の三本木農業高校生として在籍し、学科構成は植物科学・動物科学・農業機械・環境土木・農業経済の5学科5クラスである。1・2年生は三本木農業恵拓高校生として、普通（2クラス）・植物科学・動物科学・環境工学・食品科学の5学科6クラスで、全校生徒は570人である。

(3) 研究協議の視点（1）学校の特色を生かした魅力ある学校農場の在り方

① 各科で特徴的な授業を展開（学校設定科目）

ア 植物科学科（農業経営シミュレーション・施設園芸ビジネス：模擬経営，JGAP：米「精米」2020年2月～）

イ 動物科学科（愛玩動物，愛玩動物飼養技術：愛玩動物の適正な飼養・管理に必要な知識と技術の習得，馬学：馬の生理・生態及び騎乗や飼養管理に必要な知識と技術の習得，課題研究：命の花プロジェクト）

ウ 環境工学科（測量実践：生産基盤整備，景観設計に必要な測量方法や技術習得など，地球環境科学：地球環境問題に必要な知識と技術の習得，地球環境保全の在り方など）

エ 食品科学科（地域資源活用：地域資源の有用性を理解し，それを活用した地域振興など）

オ 普通科（学校設定教科：地域・観光 栽培と資源活用：農業を題材とした学習を通して，地域社会が成立した経緯，経済の仕組みなどの理解を深め農業が地域において果たす役割や食の重要性を理解）

② 農業経営者育成高等学校（志岳寮の農業教育）

昭和42年4月全国22番目の文部省指定自営者養成農業高等学校（H10.7 農業経営者育成高等学校と名称変更）と

なり、昭和44年10月から「志岳寮」として寮教育を実践し今年53年目を迎える。現在132名（男子71名、女子61名：義務入寮生70名、希望入寮生4名、2・3年特入生58名）が入寮し、1年生は朝夕の当番実習（1週間を年間4回）を実施。特入生は、朝の当番実習の巡回指導にあたる。

③ 地域の伝統文化などの継承活動

植物科学科では、諸団体と連携し、伝統工芸品「きみがらスリッパ」の材料のデントコーンの栽培プロジェクト(11年目)や奥入瀬渓流のコケ観察を通して、地域における農業や自然・伝統文化の背景を理解(10年目)、「十和田むらさき」保存研究会の協力を得ながら、「むらさき」についての研究（紫根による草木染めの染料等）を行っている。

④ 農場見学、体験学習等の受け入れ

ア 体験学習（ジャガイモ・サツマイモの植付収穫、リンゴの収穫：約40～50団体、約1,200～1,500人が来校）

イ ファームナビゲーター（体験学習の来校者に農作物の収穫補助や、農場を案内する生徒で、校内検定合格者）

ウ 三農直売所【サンファーム】(H11.11.11オープン、木曜日開催で年間24日：毎回約20人の来客)

エ 野菜苗販売（2日間150～200万円売上）

オ 三農祭（文化祭）農産物販売（2日間1,500～2,000人来場、500～600万円売上）

⑤ その他

全校田植えは普通科も参加している。今年は新型コロナにより中止とした。農業クラブ活動では、日本一にこれまで26部門（プロ2・意見7・農鑑10・農情6・平板1）が輝いている。

(4) 成果と課題

①生徒は各科の特徴的な学びを通して、専門的な知識と技術を着実に身につけている。

②寮の利点を最大限に活用し、学校の学習以外の研究活動や学科の学習内容に関係する学びの機会を得ている。

例) 農作物の栽培管理・調査・研究、愛玩動物の管理、牛の分娩など。

③農業高校を母体とする普通科として、「普通科は面白い」をキャッチフレーズにして活動している。全校田植え、意見発表、プロジェクト発表への参加など。

④地域と連携した継続的な活動により、地域の期待に応え、地域をリードし、地域を創り上げていく高校として認識されている。

⑤来年度（R5年）から農業4学科計12クラスとなることから、教員数が減ることが予想されるため、農場部門の見直し等を含めた再編、それに伴う部門運営計画、農場予算の検討が必要となる。

⑥農場全体の再構築（老朽化した施設、農業機械など）

(5) おわりに

歴史と伝統のある学校としての誇りと、地域に期待され信頼される学校としての使命感を持ち、地域を支える人材を育成するため、農場の教育資源を最大限に活用し、生徒の成長につながる農場運営を実践したい。

(6) 質疑応答

（五農）普通科で行う農業科目の担当者は誰か。

（三農）普通科付きの農業教員2名が担当している。また、2年生から授業が始まる地域資源活用は、学校設定科目となっている。

（五農）植物科学科で長く続いているプロジェクト活動があるが、長く続ける秘訣はあるか。また、止める判断や、タイミングはどう考えているか。

（三農）担当者の意地や、地域課題解決への信念だと思う。三農は地域から大きな期待をされており、奥入瀬の苔については担当教員がプライベートでも交流をもつなどして続いている。

止める判断やタイミングについて、教員減による必然的な取捨選択もあるが、まだそこまでの話に至っていない。リスクなどを考慮し、担当者の判断になると思う。

（弘実）普通科の生徒の現状と、進路等の今後の狙いを教えて欲しい。

（三農）普通科と農業科の生徒の壁はあまり感じない。どちらが上という感じも受けない。農業の授業も楽しく取

り組んでいるが、普通科の一部の生徒に、農業科の授業を受けることに疑問を抱いている生徒もいるようだ。進路に関しては、A0や推薦等、農業高校のノウハウを活かし対応していく。勿論、農業系に進んでもよい。

(弘実) 普通科生徒の入寮も可能か。当番実習も行うのか。

(三農) 可能である。実習服も購入してもらい朝夕の当番実習を行う。また、寮食準備など他の農業科の入寮生と同じ生活をしている。

(六戸) 農業高校にある普通科ということで、青森県内では特色ある学科としてスタートしたが、生徒の成長度合いを評価する仕組みや形というものはあるのか。

(三農) 学年ごとのアンケートを実施し、結果から変化、成長を読み取っている。研究開発部という分掌と連携し授業や外部講師の講演等、積極的に取り組んでいる様子は見られる。他学科だと、植物科学科と動物科学科は寮生活を通して1年間で大きく成長している。普通科にしても、様々なことを楽しみながら取り組んでいき、与えられる役割を果たすことで成長していくと考える。

(六戸) 普通科と農業科の多様な交流や活動が、生徒の成長に繋がると考えている。普通科の生徒で農業系の進路を希望する生徒はいるのか。

(三農) 明確な答えをこの場では出せないが、アンケートを取るなどしてデータをとり、次の一手を模索している状況である。統合校として評価されるよう、次へ繋げていきたい。

以下、他参加校の、「研究協議の視点(1)学校の特色を生かした魅力ある学校農場の在り方について」の事例発表表に関する質疑応答。

(五農) 弘実は多岐にわたり、企業と連携した商品開発を行っているが、企業との契約等どうしているのか。

(弘実) 簡潔に言えば融通の効くところ。個数など無理のない範囲で取り組んでくれるところになってくる。

(柏農) 五農の宇宙毛豆は、今でも高校に保管してあるのか。

(五農) 保管している。現在でも、発芽率の調査をしているものもある。ハウス内でとどまっていて、露地栽培まではいかない。

(柏農) 宇宙毛豆の具体的成果は。

(五農) 特に地球上の毛豆と栽培上の変化はないが、個人的にはそのことが良い成果だと思っている。宇宙にいったから地球では栽培できないなど、そういった変化がある方が怖いと考える。

2 指導助言 青森県立弘前実業高等学校 教頭 太田 良孝

発表校である三農からは、広大な敷地に畜産施設や寮もあり、学校の特色を生かした授業を展開していることを説明していただいた。学校農場は農業高校の顔であり中心部である。生徒の学習の検証と発展の場であると説明にあったが、まさにその通りである。三農の他に事例説明をしていただいた3校も、地域と連携した独自の活動について紹介いただいた。経験を積むことや、外部と対応しコミュニケーション能力の向上を目指すなど、学習指導要領で示していることを実践していると感じた。各校においては、入学時と比較し、卒業時にはこのくらい成長して欲しいという目標を設定し、取り組んでいただきたい。学習指導要領で示されていることは、農業高校は大分前から取り組んできたので、他学科をリードするようなイメージを持っている。プロジェクト活動、大学や企業との連携は目新しいものではない。今後も地域のことを調査しながら、課題解決へ取り組んでいくのみである。

農業高校は様々な人が出入りする、地域に期待された開かれた学校である。地域の独自性を踏まえながら教育活動を行い、新しいことへも取り組み地域をリードして欲しい。また、生徒にも様々な機会を与えて活動して欲しい。農業高校は歳入をあげなければならず、その中で生徒と関わっていくという厳しい面もあるが、各部門で連携して取り組んで欲しい。利益を上げながらも教育現場として、生徒と一体となって進めて欲しい。

三農の発表資料「5.おわり」に、「歴史と伝統のある学校としての誇りと、地域に期待され信頼される学校としての使命感を持ち、地域を支える人材を育成するため、農場の教育資源を最大限に活用し、生徒の成長につながる農場運営を実践したい。」この言葉を皆さんと共有し、指導助言の締めくくりとする。

【 講 演 会 】

演 題

『グローバル GAP の今日的意義～日本農業と地域の未来に向けて～』

講 師

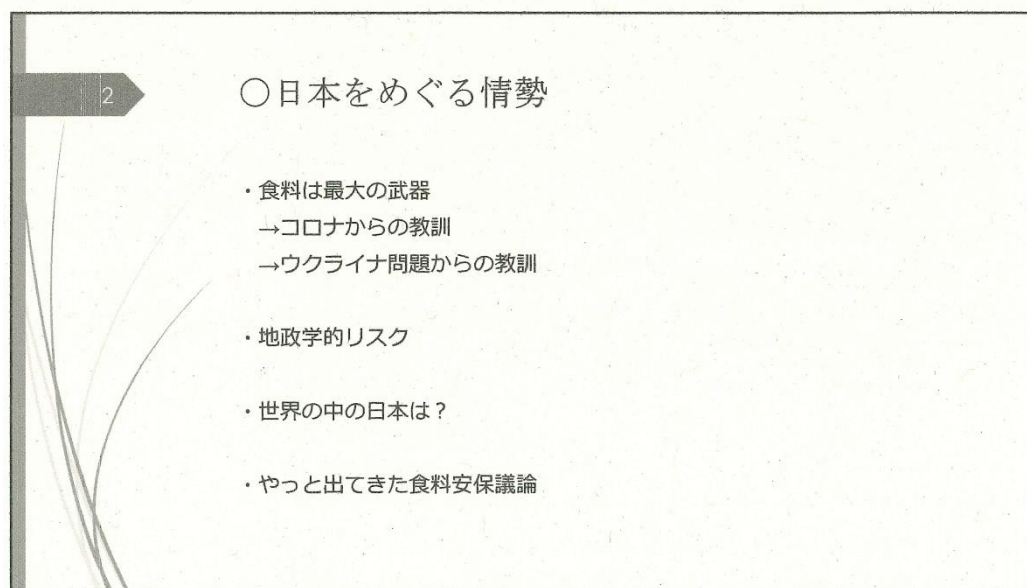
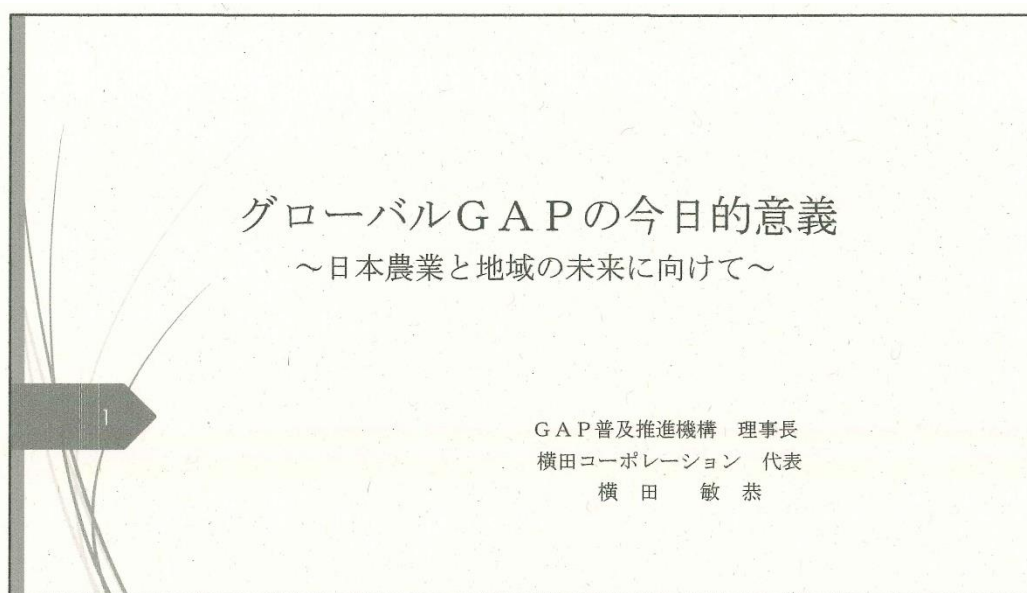
GAP 普及推進機構 理事長

GLOBALG. A. P. 協議会 理事長

星薬科大学 客員研究員

日本農産物輸出組合 顧問

横田コーポレーション 代表 横 田 敏 恭 氏



○農業政策とGAP①

- ・農林水産省で最初にGAPの導入を考え始めたのは・・・
- ・現在の担当部局は・・・
- ・農産物と畜産物では異なる部署が担当
- ・水産物に至ってはさらに異なる部署が担当
- ・一方、食品安全、環境保全、労働安全といったGAPの部分的活用は進行
- ・ただし、「GAP」とは何かが本当に理解され、取り組まれているかは？？？

○農業政策とGAP②

食料・農業・農村基本法に基づく「基本計画」で位置付け

第3 食料、農業及び農村に関し総合的かつ計画的に講ずべき施策

2. 農業の持続的な発展に関する施策

(6) 需要構造等の変化に対応した生産基盤の強化と流通・加工構造の合理化

④ 農業生産工程管理の推進と効果的な農作業安全対策の展開

ア 農業生産工程管理の推進

食品安全や環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理等に資する農業生産工程管理（GAP）について、令和12年までにほぼ全ての産地で国際水準GAPが実施されるよう、現場での効果的な指導方法の確立や産地単位での導入を推進する。また、文部科学省と連携し、農業高校でのGAP教育を推進するなど、農業教育機関におけるGAPに関する教育の充実を図る。

(1) 力強く持続可能な農業構造の実現に向けた担い手の育成・確保

② 経営継承や新規就農、人材の育成・確保等

イ 農業を支える人材の育成のための農業教育の充実

若い人に農業の魅力を伝え、将来的に農業を職業として選択する人材を育成するため、農業高校・農業大学校等の農業教育機関において、先進的な農業経営者等による出前授業、現場での実習、農業生産工程管理（GAP）に関する教育、企業や他の教育機関、研究機関等と連携したスマート農業技術研修等、実践的・発展的な教育内容の充実やそのための施設・設備等の整備を進める。

○農業政策とGAP③

- ・環境と調和のとれた食料システムの確立のための環境負荷低減事業活動の促進等に関する法律（令和4年5月2日公布）
 - ⇒「みどりの食料システム戦略」を進める新法
- ・改正植物防疫法（令和4年5月2日公布）
 - ⇒総合防除（IPM）を進めるための改正？
- ・農業政策で最も重要なことは何か？

植物防疫法（改正：令和4年5月2日公布）

（法律の目的）

第一条 この法律は、輸出入植物及び国内植物を検疫し、並びに植物に有害な動植物の発生を予防し、これを駆除し、及びそのまん延を防止し、もつて農業生産の安全及び助長を図ることを目的とする。

（定義）

第二十二條（略）

2 この章で「総合防除」とは、有害動物又は有害植物の防除のうち、その発生及び増加の抑制並びにこれが発生した場合における駆除及びまん延の防止を適時で経済的なものにするために必要な措置を総合的に講じて行うものをいう。

（総合防除基本指針）

第二十二條の二 農林水産大臣は、指定有害動植物の総合防除を推進するための基本的な指針（以下「総合防除基本指針」という。）を定めるものとする。

2 総合防除基本指針においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

- 一 指定有害動植物の総合防除の推進の意義及び基本的な方向
- 二 指定有害動植物の種類ごとの総合防除の内容に関する基本的な事項
- 三 指定有害動植物の種類ごとの発生の予防及び当該指定有害動植物が発生した場合における駆除又はまん延の防止の方法に關し農業者が遵守すべき事項に関する基本的な事項
- 四 第二十三條第一項に規定する発生予防事業の対象とする指定有害動植物その他当該発生予防事業に関する事項
- 五 第二十四條第一項に規定する異常発生時の基準に関する事項
- 六 第二十四條第一項に規定する異常発生時防除の内容に関する基本的な事項
- 七 その他必要な事項

植物防疫法（改正：令和4年5月2日公布）

（総合防除計画）

第二十二條の三 都道府県知事は、総合防除基本指針に即して、かつ、地域の実情に応じて、指定有害動植物の総合防除の実施に関する計画（以下「総合防除計画」という。）を定めるものとする。

2 総合防除計画においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

- 一 指定有害動植物の総合防除の実施に関する基本的な事項
- 二 指定有害動植物の種類ごとの総合防除の内容
- 三 第二十四條第一項に規定する異常発生時防除の内容及び実施体制に関する事項
- 四 指定有害動植物の防除に係る指導の実施体制並びに市町村及び農業者の組織する団体その他の農業に関する団体との連携に関する事項
- 五 その他必要な事項

○農業に求められるもの

・食料の安定供給

➡そのために必要なことは国内における食料自給率、食料自給力の向上

・需要に応じた生産が大切？

➡過去から繰り返される言葉。

コメでいえば、要は「縮小再生産」を進めること。

・農業生産の方向性を決めていくのは、「農業経営者」

➡国は、ほぼ全ての産地で国際水準GAPが実施されるよう進めると基本計画に明記

➡つまり、全国のグローバルGAPを活用する農業経営者が農業の方向性を決めていくということ

9

○日本農業とグローバルGAP①

- ・日本の食料生産を維持、拡充するために必要なこと
↓
自ら考える「農業経営者」＝グローバルGAP
- ・将来に向けて日本農業を維持・拡大するために必要なこと
↓
持続可能な農業の実践＝グローバルGAP
- ・経営者として必要なこと
↓
経営改善を続けていくこと
↓
リスク評価とリスク管理の徹底＝グローバルGAP

10

○日本農業とグローバルGAP②

- ・農業経営のためのグローバルGAP
↓
常に経営改善
↓
リスク評価とリスク管理
 - ・食の安全
 - ・環境保全
 - ・労働安全
 - ・人権保護（労働者の権利保護）

11

○日本農業とグローバルGAP③

- ・教育手段としての効果
↓
「自ら考える」
「リスク評価とリスク管理」
- ・先輩から後輩への伝承
↓
先生たちが「教える」を前面に出さないことが重要
※時々首をかしげる事例も・・・
- ・卒業後には社会人として、農業経営者として、大きく飛躍する可能性
↓
日本の未来は決して暗くはない！

12

○グローバルGAPとSDGs



13

○GAPとはそもそも何か？

- ・生産工程管理
- ・適正農業規範
- ・よい農業の実践
- ・普通の農業の実践
- ・ハイレベルの農業の実践
- ・GAP指導者
- ・コンサルタント
- ・アドバイザー

14

○現在から未来に向けて①

- ・これまでの日本の農業はトップダウンで決定。
法制度で細部を縛り、補助金・助成金でトップが考える方向へ誘導。
結果として、現在の農業がある！
- ・近年になってやっと「農業経営者」が輩出。
グローバルGAPを活用して、常に農業経営者としてレベルアップ！！
- ・グローバルGAPを活用して、常にリスク評価、リスク管理を実践
↓
地域における災害対応への活用！

○現在から未来に向けて②

- ・グローバルGAPは
 - ➡農業経営者の育成、成長のための手段
 - ➡農業経営のための必須要素
 - ➡地域の災害対応、振興のために活用
 - ➡食料安全保障、特に自給率向上に貢献

○グローバルGAPの意義とは！

- ・誤解を恐れずに言えば
 - ➡グローバルGAPは農業のゴールド免許
ゴールド免許取得者=グローバルGAP認証取得者、は優良農業経営者
- ・農業経営者を育てるためのツールの一つ
 - ➡若い人の育成にも活用

「これからの農業の基礎・基盤の一つ=グローバルGAP！」

【 部 会 の 動 き 】

- 令和4年4月19日(火) 第1回高教研農業部会役員会(於 青森市 青森県総合社会教育センター)
- 5月12日(木) 第1回高教研理事会(於 青森市 青森県総合社会教育センター)
- 5月19日(木) 事務局長会議(研究紀要編集及び会計事務説明)(於 青森市 青森県総合社会教育センター)
- 6月10日(金) 役員名簿並びに研究大会要項提出 高教研事務局へ
- 6月30日(木) 第2回高教研農業部会役員会(於 青森市 青森県総合社会教育センター)
- 8月9日(火)～10日(水) 令和4年度全国農業高等学校長協会東北支部総会並びに研究協議会
第61回東北地区高等学校農業教育研究大会並びに第20回全国高等学校農場協会東北支部大会(於 秋田市 秋田ANAクラウンプラザ)担当:大曲農業高校
- 8月17日(水)～18日(木) 令和4年度青森県高等学校教育研究会農業部会研究大会(運営担当:柏木農業高校)(於 平川市 柏木農業高校)
- 9月26日(月) 令和4年度研究紀要原稿提出 高教研事務局へ
- 10月下旬 令和4年度研究大会報告書及び令和4年度研究大会計画書提出、令和5年度研究大会講師謝金助成申請(一次締め切り)高教研事務局へ
- 11月10日(木)～11日(金) 令和4年度青森県農業関係高等学校技能技師(農事業務)研修会(於 平川市 柏木農業高校)
- 11月30日(水) 第2回高教研理事会(於 青森市 青森県総合社会教育センター)
- 11月30日(水)～12月1日(木) 第59回農業教育研究協議会(於 東京都 衆議院議員会館、星陵会館、全国町村会館)
- 12月2日(金) 農業教員技術研修会〔食品製造〕(担当:三本木農業高校・三本木農業恵拓高校)(於 十和田市 三本木農業高校・三本木農業恵拓高校)
- 令和5年1月25日(水)～26日(木) 第3回高教研農業部会役員会(於 青森市 ウェディングプラザアラスカ)
- 2月上旬 「研究紀要」第66集の発行 高教研事務局が高教研ホームページにPDFデータ掲載
- 3月15日(水) 会計清算書および証拠書類の提出(最終決算)高教研事務局へ

(関 連 事 業)

- 令和4年10月15日(土)～16日(日) 第32回全国産業教育フェア青森大会さんフェア青森2022「響かせよう産業の音色～縄文の風吹く青森で～」(於 青森市 マエダアリーナ、アピアあおもり、東奥学園高等学校、浜町埠頭、アップルパレス青森)(於 弘前市 青森県武道館)

(令和4年度青森県高等学校教育研究会農業部会役員)

役員名	氏 名	所属校名	役員名	氏 名	所属校名
部 会 長	工 藤 清 寿	五所川原農林高等学校	委 員	佐々木 篤	三本木農業高等学校・三本木農業恵拓高等学校
副部会長	中 村 豊	三本木農業高等学校・三本木農業恵拓高等学校	委 員	加 藤 佑 也	五所川原農林高等学校
理 事	浅 利 成 就	柏 木 農 業 高 等 学 校	委 員	鳴 海 博 方	柏 木 農 業 高 等 学 校
理 事	小 泉 朋 雄	名 久 井 農 業 高 等 学 校	委 員	北 上 守	名 久 井 農 業 高 等 学 校
理 事	對 馬 嘉 晴	弘 前 実 業 高 等 学 校	委 員	澁 谷 圭 治	弘 前 実 業 高 等 学 校
			事 務 局	加 藤 佑 也	五所川原農林高等学校
			庶務会計	長谷川 将 臣	五所川原農林高等学校
			編集委員	田 中 満	五所川原農林高等学校

【 研 究 テ ー マ 】

紀 要 (集)	年 度	研 究 テ ー マ 【主テーマ】 生徒の「生きる力」を育む活力ある農業教育の創造 と実践	会 場	会 員 数	大 会 参加数	大会 発表 者数
62	平成 29 年度	1 農業教育における原則履修科目の教科指導はどうあればよいか（教科指導） 2 先進的で魅力のある農業教育の実践はどうあればよいか（農業教育の充実・振興） 3 豊かな人間性を育み、生徒一人ひとりの個性の伸長を図るキャリア教育推進の農業教育はどうあればよいか（農業教育課題） 4 生徒の実践的・創造的な態度・能力を育む農場運営はどうあるべきか（学校農場運営）	五所川原農林高校	151	47	10
63	平成 30 年度	1 『主体的・対話的で深い学び』に対応した教科指導はどうあるべきか（教科指導） 2 社会のグローバル化に対応した安全・安心な農業教育及び関係機関等と連携したキャリア教育の推進はどうあるべきか（農業教育の充実・振興） 3 生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか（学校農場運営）	柏 木 農 業 高 校	150	62	9
64	令和 元 年度	1 『主体的・対話的で深い学び』に対応した教科指導はどうあるべきか（教科指導） 2 社会のグローバル化に対応した安全・安心な農業教育及び関係機関等と連携したキャリア教育の推進はどうあるべきか（農業教育の充実・振興） 3 生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか（学校農場運営）	名 久 井 農 業 高 校	151	56	8
—	令和 2 年度	新型コロナウイルス感染症拡大防止により中止	五所川原農林高校	151	—	—
65	令和 3 年度	全体研究 「高等学校学習指導要領教科農業」と「学習評価」について（動画による解説）	三 本 木 農 業 高 校 三本木農業恵拓高校	142	37	0
66	令和 4 年度	1 社会のグローバル化に対応した安全・安心な農業教育及び関係機関等と連携したキャリア教育の推進はどうあるべきか（農業教育の充実・振興） 2 社会のグローバル化に対応した安全・安心な農業教育及び関係機関等と連携したキャリア教育の推進はどうあるべきか（農業教育の充実・振興） 3 生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか（学校農場運営）	柏 木 農 業 高 校	124	50	5